

放射線科学

## 人間ドック

玉木 正男

人間の病気には、苦痛、障害を招くことなしに始まって進行するものが少なくないことは、昔からよく知られている。従って、病気を持っている感覚がなく外見上健康な多数の人を対象として、特に学校、職域、地域などの集団について健康検査（いわゆる「集団検診」、「集検」）が行われて来た。これには、疾患発生頻度の高い臓器について、手数の比較的簡単な検査が実施されるのは、能率から云ってやむを得ないであろう。

これに対して、中年以降の人々が平生の職務や家業を休んで、「集検」よりも詳しい検査を、一般に数日間入院して受ける企画がわが国で普及し「人間ドック」と呼ばれている。長く航海した船を、定期的にドックに入れて行なう点検（必要があれば修理）にたとえた日本製の医学用語である。わが国での「人間ドック」の受診者は、最近の統計では年間200万人を超えている。

「人間ドック」の内容の主なものとしては、体重測定、検尿、検便、検血、血圧測定、心電図検査、小型フィルムでの間接撮影ではなく普通のX線フィルムによる胸部の撮影及び消化管（主に胃十二指腸）の透視撮影、最近では肝臓、胆嚢、膵臓の超音波検査をふくむものもある。検血では、糖尿病に関係ある血糖値、動脈硬化と関連深いコレステロール量、その他肝機能異常と関連ある血液成分の測定などが注目される。心電図検査では、一定の運動を行った前後の変化をしらべて（「負荷心電図」の検査）狭心症を発見できる例も少なくない。

「人間ドック」で発見された異常のうちには、その後定期的の「ドック」による追究監視の要望されるケースもあり、またそのまま放置することなく精密な検査（精検）をぜひ必要とするケースもある。最近の全国統計によれば、「人間ドック」で「異常なし」（健康）と診断される人はおよそ4人に1人であるという。

いわゆる成人病、特に癌と心臓病（冠動脈の動脈硬化によるものが最も多い）の早期発見において、「人間ドック」の果たす役割は大変大きいといえよう。

（大阪市立大学名誉教授）